

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業  
(領域開拓プログラム)

# 研究成果報告書

「責任ある研究・イノベーションのための組織と社会」

研究代表者： 吉澤 剛

(大阪大学 大学院医学系研究科 准教授)

研究期間： 平成26年度～29年度

## 1. 研究基本情報

課題名	学術研究の変容とミスコンダクトについての人文学・社会科学研究
研究テーマ名	責任ある研究・イノベーションのための組織と社会
責任機関名	国立大学法人大阪大学
研究代表者(氏名・所属・職)	吉澤剛・大学院医学系研究科・准教授
研究期間	平成26年度 ～ 平成29年度
委託費	平成26年度 2,500,000円
	平成27年度 3,450,000円
	平成28年度 3,200,000円
	平成29年度 2,250,000円

## 2. 研究の目的

最近、わが国では多くの研究不正問題が明らかになっているが、研究不正行為は学術研究の信頼性を根本からゆるがすものである。信頼性の回復に向けて、研究組織や研究者・学生に対する教育の見直しが求められている。一方で、学術研究のあり方自体が、産学連携などイノベーションの推進とともに大きく変容していること、研究不正問題もそのような学術研究の変容と切り離せないことが指摘されている。イノベーションは一般的に、新しい価値を生み出し、社会的に大きな変化を起こすことと定義される。また、イノベーションにおいては市場価値の創出のみならず、社会的価値をも創出していくことが期待されている。学術研究に求められることは、イノベーションの創出への貢献だけでなく、イノベーションが社会にとって真にのぞましいものとなっているかを多角的に検証したり、イノベーションと学術研究との関係を批判的に検討したりすることにある。学術研究が社会にさまざまな波及効果をもたらすようになった現在、たとえば米国国立科学財団(NSF)や英国リサーチカウンシルでは研究に対する幅広い社会的・経済的インパクトの評価も求められるようになっている。こうした研究やイノベーションのあり方を問い直すにあたり、人文学・社会科学の新たな役割も期待されている。

このような背景のもと、近年、欧米では「責任ある研究・イノベーション」という新しい学際的研究フレームワークが登場している。そこでは研究不正行為を抑止し、すぐれた研究活動のあり方を求める「研究公正性」や「責任ある研究活動」を推進するとともに、社会的・倫理的にも適切なイノベーションをうながしている。また、人文学・社会科学分野の研究者と自然科学分野の研究者が共同し、イノベーションに向けた社会的・政策的活動の実現に寄与している。

本研究では、イノベーションを軸として責任ある研究活動の視野を広げるため、次の二つの目的をかかげる。第一に、「責任あるイノベーション」の基盤となる「信頼性の高い知識を生み出す学術研究のあり方」として、学術研究の信頼性をいかに確保するのかについて、研究不正問題の実態や要因を明らかにするとともに、近年の学術研究の変容を見据えたうえで、「責任ある研究活動」を推進するための方策について検討する。第二に、「イノベーションの創出のための研究組織の革新」として、責任ある研究活動を推進してイノベーションを生み出す研究組織のあり方や、基盤となる学術研究の推進方策を議論する。そこで鍵となるのが、研究組織の革新に向けた学習、社会との対話・連携である。

本研究の意義は、社会的価値の創出に向けた研究組織の革新という論点によって、経営学や政策学、教育学への広がりのみならず、将来の組織や社会に対する責任、信頼、ケアといった観点で哲学や倫理学、心理学など各分野の新たな展開が期待されることにある。さらに、工学倫理や生命倫理など自然科学系分野に関する知見を取り入れることで、人文学・社会科学分野の研究活動に示唆をあたえ、異分野連携の共同研究のさらなる発展に資することができる。

## 3. 研究の概要

学術研究のあり方は産学連携などイノベーションの推進とともに大きく変容しており、研究不正問題もそのような

学術研究の変容と切り離せない。そこで本研究では、第一に、責任あるイノベーションの基盤となる「信頼性の高い知識を生み出す学術研究のあり方」として、学術研究の信頼性をいかに確保するのかについて、研究不正問題の実態や要因を明らかにするとともに、近年の学術研究の変容を見据えたうえで、責任ある研究活動を推進するための方策について検討する。第二に、「イノベーションの創出のための研究組織の革新」として、責任ある研究活動を推進してイノベーションを生み出す研究組織のあり方や、その基盤となる学術研究の推進方策を議論する。

本研究では、先行研究レビューや、国内学会・有名学術誌の倫理綱領や行動規範、投稿規定等の分析を行い、研究公正・研究倫理の教育及び研究遂行に伴う現状整理や、論点・課題の抽出を進めた。その後、研究不正対策にとどまらず広く責任ある研究のための活動を洗い出し、生命科学分野を中心とする会員数1000名を超える52の学協会について、ホームページの調査分析を行った。その結果、学会指針において捏造・改竄・剽窃(FFP)に関する条項は3割近くの学会で言及がなされていたものの、デュアルユース、ハンディキャップ/マイノリティへの配慮、差別禁止への言及例は少ないことが明らかとなった。また、責任ある研究を推進するための資金配分機関のあり方に着目し、各機関の実務者と協働しながら、多様な関係者の関与・参画、熟慮・熟議における幅広い視点の織り込み、将来の技術や社会への展望などの取り組みの実態について、アクションリサーチを実施した。責任ある研究・イノベーション(RRI)という学術的議論に国内で先鞭をつけることにより、政策研究大学院大学(GRIPS)や海外研究プロジェクト等との協働を深め、外部専門家の協力を得ながら日本におけるRRIの実践をまとめることができた。その過程では、大学や学協会といった研究組織のそのものを問い直す議論や活動を展開し、それらの補完的な主体として、地域に根ざした責任ある研究活動を試行的に実践した。人文・社会科学研究分野はもとより、生命科学などを中心とする自然科学研究分野との継続的な連携を達成し、さらに、地域における問題解決を志向したトランスディシプリナリー研究、市民科学やボトムアップイノベーションの今後の議論の方向性に大きな影響を与えた。

#### 4. 研究プロジェクトの体制

研究代表者・グループリーダー・分担者の別	氏名	所属機関・部局・職(専門分野)	役割分担
研究代表者 兼グループリーダー	吉澤剛	大阪大学・大学院医学系 研究科・准教授	【イノベーショングループ】研究フレームワーク構築、基本概念の整理、研究組織の制度的分析
分担者	平川秀幸	大阪大学COデザインセンター・教授	【イノベーショングループ】イノベーション概念分析、人文学・社会科学研究論
分担者	山内保典	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授	【イノベーショングループ】ワークショップ等のアクションリサーチ、研究に必要な機能やスキルについての心理学的研究
分担者	田原敬一郎	公益財団法人未来工学研究所・政策調査分析センター・主任研究員	【イノベーショングループ】対話・連携の場の設計・運営にかかる研究、対話・連携手法の効果測定・評価
分担者	標葉隆馬	成城大学・文芸学部・専任講師	【イノベーショングループ】学協会データ収集・分析、研究に必要な機能やスキルについての教育学的研究
分担者	中尾央	山口大学・国際総合科学部・助教	【イノベーショングループ】研究組織における知識・権力・コミュニケーション分析
分担者	川本思心	北海道大学・理学系研究院・准教授	【イノベーショングループ】研究-社会の教育事例分析

グループリーダー	中村征樹	大阪大学・全学教育推進機構・准教授	【研究活動グループ】概念整理・類型化・比較分析、研究組織の歴史的分析
分担者	東島仁	山口大学・国際総合科学部・講師	【研究活動グループ】専門職倫理に関する先行研究レビュー、研究不正事例分析、質問票調査
分担者	秋谷直矩	山口大学・国際総合科学部・助教	【研究活動グループ】研究者共同体構成員に対するインタビュー、ラボラトリー研究
分担者	三成寿作	大阪大学・大学院医学系研究科・助教	【研究活動グループ】専門職倫理に関する先行研究レビュー
分担者	小門穂	大阪大学・大学院医学系研究科・特任助教	【研究活動グループ】研究倫理の動向整理、倫理委員会及び倫理審査資料の調査分析

## 5. 研究成果及びそれがもたらす波及効果

本研究では、JST/RISTEX、NEDO、AMEDという資金配分機関の実務者と連携し、責任ある研究活動に向けたプログラムの現状と可能性についてアクションリサーチを通して、新たなプログラム化に対する協働を実施した。また、大学のURA部門や全学教育研究推進機構などを通じて、責任ある研究活動やRRIの可能性を働きかけ、科学技術社会論(STS)や科学史はもとより、哲学、倫理学、生命倫理学、医療社会学、心理学、看護学、経営学、文化政策学など幅広い人文学・社会科学研究分野の学会などでの成果発表や意見交換を行い、多様な研究者・実務者との交流や継続的な連携を進めることができた。特に、生命科学分野の学協会における「責任ある研究活動」を明らかにしたことにより、再生医療学会などでは社会とのコミュニケーションのあり方を再検討するようになった。これは本研究の成果が自然科学研究コミュニティの活動を問い直し、改める契機を与えたという点で大変意義深い。

また、2016年より政策研究大学院大学(GRIPS)にて「科学技術イノベーションと社会に関する測定」プロジェクトにおいて政策レビューと指標に関する若手勉強会が立ち上がり、吉澤・田原・標葉ら本プロジェクトメンバーも参加している。この勉強会ではOECD Blue Sky IIIや世界科学館サミット2017(SCWS2017)への参加や国内関係者WSなどを通じて、責任ある研究活動を測るための指標づくりを進めており、国際的なコミュニティに向けて日本からの発信を狙っている。この過程で、多様な人文学・社会科学研究者のほか、自然科学研究者や政府や民間企業の実務者との連携や協働を行っており、当研究の知見も積極的に活用されている。

デュアルユース問題については、川本が実証分析を着実に進めているほか、標葉・吉澤らも国立国会図書館との連携により、研究評価やバイオセキュリティの視点でそれぞれ議論を行ってきた。これは近年になってようやく日本学術会議や各大学などでも議題に上げられるようになったが、その先鞭をつけたという点と、歴史や評価、倫理、生命科学などが交錯した視点を提供するという点で、今後の科学技術と安全保障をめぐる人文学・社会科学研究の深耕に大きく資する。

何よりも、ミスコンダクトに関するテーマで採択された本研究において、その理論的枠組として、責任ある研究・イノベーション(RRI)というフレームワークを用いたことは、日本学術振興会(JSPS)が本年度より再び立ち上げる「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業(領域開拓プログラム(研究テーマ公募型))」の課題BとしてRRIが取り上げられたことに3年先んじており、本研究テーマの社会的意義や学術的先取性・妥当性がJSPS自体に改めて評価されたともいえる。2017年11月にはJSPSと大阪大学の共催によって人文学・社会科学研究推進のあり方を考えるシンポジウムが開催され、本研究代表者も登壇、本研究の成果発表を行い、パネルディスカッションに参加した。JSPSが今後どのように異分野間での連携や協働を促し、人文学・社会科学研究に対する支援を進めていくかについて、本研究で実施してきた資金配分機関研究の成果が活用され、JSPSの内部ガバナンスに波及的な効果をもたらすものと期待される。

## 6. 今後の展開

本研究を通じて得られた責任ある研究活動もしくはRRIの課題は次の4点である。①方向性(政治性)の組み込み。研究やイノベーションにおける公正性は、研究者ないしイノベーターによる権力主体に向けた表明であるにも関わ

らず、しばしばその政治性を消去して責任や未来を語ろうとするところに齟齬がある。政策実務者コミュニティや学会・研究者コミュニティ、大学といったクライアントに向けて、それぞれの主体の将来像を問いかけるという意味での責任の再構築がありうる。それは、行政や大学・学協会アイデンティティを問い直す研究活動となるだろう。

②規範意識への埋め込み。そうしたアイデンティティの模索は、単なる法令遵守で善しとする研究者のあり方自体が問われなければならない。そのための教育としては、ラボや学会を含めた研究者コミュニティの文化を変えていくという大きな挑戦に向かわざるをえない。研究者個人の規範意識に訴え、制度的再帰性を持たせる教育のあり方が研究されてよい。③創造性・エレガンスの評価。規範意識を改める契機の一つは、研究者個人がポジティブに倫理や責任を考えられるようにすることである。学術論文や言語的な理解では表しえないものをどう評価して研究者の意識を変革するか。また、それが研究やイノベーションそのものに深い関わりがあることを示すための研究が必要である。④ボトムアップ・エンゲージメント。責任ある研究活動やRRIで決定的に欠落しているのは、専門家コミュニティに属さない個人による研究・イノベーション活動の責任の所在である。ファブラボや市民科学が単なるアマチュアリズムでなく、研究やイノベーションの本流に大きな影響を及ぼす存在となりつつある現在、こうしたボトムアップの研究・イノベーションをどのように定位するか。

上記の課題に応えるように、JSPS領域開拓プログラムの課題B「『責任ある研究とイノベーションの概念』と『社会にとつての科学』の理論的実践的深化」において「RRIの新展開のための理論的・実践的研究—教育・評価・政治性に注目して」が平成29年度の研究テーマに採択された。研究代表者および一部の分担者は本プロジェクトメンバーであり、RRIに関する当プロジェクトの研究成果が十分に参照されるとともに、本研究を引き継いで発展させていくことが期待される。さらに、当該研究代表者を通じて、もう一方の研究テーマである「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究—21世紀型参加のビジョンと試行」とも連携が予定されている。また、2016年より山口大学を拠点としたRRI研究のネットワーク化が模索されており、市民科学などを交えた形での地域におけるRRIが根づいていくことも考えられる。このほか、JST「プログラムマネージャー(PM)の育成・活躍推進プログラム」において、安藤二香氏が代表を務める「共創的イノベーションのための方法論と人材基盤の構築に向けた検討」に田原・吉澤が関わっており、RRIを実践するためのフォーサイト方法論、中間組織・ネットワーク、WSデザイン・ツール開発、人材育成のためのカリキュラム・教材開発という目的に向けて、本研究の成果が資金配分機関における人材育成に貢献していくと見込まれる。あるいは「科学技術イノベーション政策における『政策のための科学』推進事業」(SciREX)やJST/RISTEXの「人と情報のエコシステム」研究開発領域、NEDOの安全性評価研究、AMEDの「研究倫理に関する情報共有と国民理解の推進事業(ゲノム医療実用化に係るELSI分野)」などを通じて、本研究が幅広く発展していくことも見込まれる。国際的な連携として、Horizon 2020のプロジェクトの一つであるRRI-Practiceのコンソーシアム会合(2017年3月、9月)には、GRIPSの支援のもと本研究代表者がオブザーバー参加した。OECDで進める科学技術と社会の指標化プロジェクトも含め、本研究メンバーが中心的に関わることで、本研究終了後も日本におけるRRI研究の国際的なコンタクトポイントとしての役割を務めていく。

## 【研究成果の発表状況等】

### (1) 論文

吉澤剛「サイバーバイオセキュリティ:生命と情報を越境する知に向けて」『CISTECジャーナル』165, pp.129-135, 2016年9月。

吉澤剛「私はテラスにいます—責任ある研究・イノベーションの実践における憂慮と希望」『科学技術社会論研究』Vol.14, pp.116-133, 2017年。

中村征樹「研究不正問題をどう考えるか」『哲学』第67号, pp.61-79, 2016年4月。

中村征樹「科学者の社会的責任と科学者倫理」『科学史研究』No.278, pp.165-171, 2016年7月。

標葉隆馬「人文・社会科学を巡る研究評価の現在と課題」『年報 科学・技術・社会』Vol.26, pp.1-39, 2017年6月。

標葉隆馬「学会組織はRRIにどう関わりうるのか」『科学技術社会論研究』Vol.14, pp.158-173, 2017年。

標葉隆馬「政策的議論の経緯から見る科学コミュニケーションのこれまでとその課題」『コミュニケーション紀要』Vol.27, pp.13-29, 2016年。

Ryuma Shineha, Yusuke Inoue, Tsunakuni Ikka, Atsuo Kishimoto and Yoshimi Yashiro. "Science communication in regenerative medicine: Implications for the role of academic society and science policy", *Regenerative Therapy*, Vol.7, pp.89-97, 2017年.

Ryuma Shineha, Yusuke Inoue, Tsunakuni Ikka, Atsuo Kishimoto, Yoshimi Yashiro. "Comparative Analysis of Attitudes toward Stem Cell Research and Regenerative Medicine between the Public and the Scientific Community." *Stem Cells Translational Medicine*, in press. 2017.

東島仁「研究公正から見た再現可能性問題」『心理学評論』59(1), pp.133-136, 2016年.

東島仁「研究公正・倫理教育におけるオンライン教材の利点と課題」『科学技術社会論研究』Vol.14, pp.106-115, 2017年.

秋谷直矩「人びとの実践における『行為の理解可能性の公的な基準』の探求」『看護研究』掲載予定.

A, Ema, N, Akiya, H, Osawa, H, Hattori, S, Oie, R, Ichise, N, Kanzaki, M, Kukita, R, Saijo, T, Otani, N, Miyano and Y, Yashiro. Future Relations between Humans and Artificial Intelligence: A Stakeholder Opinion Survey in Japan, *IEEE Technology and Society Magazine*, Vol.35, Issue.4, pp.68-75, 2016年.

川本思心「日本のバイオ研究と「デュアルユース」議論」『実験医学』Vol.35, No.13, pp.2246-2248, 2017年.

川本思心「デュアルユース研究に対する市民の意識：シンポジウム参加者を対象とした質問紙調査と先行調査から」『科学技術コミュニケーション』Vol.19, pp.135-146, 2016年.

川本思心「デュアルユース研究とRRI—現代日本における概念整理の試み」『科学技術社会論研究』Vol.14, pp.134-157, 2017年.

三上直之, 杉山滋郎, 小山田和仁, 千葉紀和, 伊藤肇, 新田孝彦, 川本思心「パネルディスカッション：デュアルユース問題と科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』Vol.19, pp.117-134, 2016年.

山内保典「オープンな科学コミュニケーションが公正な研究に資する可能性と役割」『科学技術社会論研究』Vol.14, pp.63-76, 2017年.

## (2) 著作物

Antonio Moniz, Go Yoshizawa & Michiel Van Oudheusden "Technology assessment in East Asia: experience and new approaches", pp.287-294 in T. Michalek, C. Scherz, L. Hennen, L. Hebákova, J. Hahn & S. Seitz eds. *The Next Horizon of Technology Assessment: Proceedings from the PACITA 2015 Conference in Berlin*. Prague: Technology Centre ASCR, 2015.

吉澤剛「開かれた時代におけるバイオセキュリティ」『ライフサイエンスをめぐる諸課題(科学技術に関する調査プロジェクト2015)』国立国会図書館, pp.33-48, 2016年3月.

Go Yoshizawa "From intermediary to intermedia: technology assessment (TA) and responsible research and innovation (RRI)", pp.37-55 in A. Moniz & K. Okuwada, eds. *Technology Assessment in Japan and Europe*. KIT Scientific Publishing, 24 June 2016.

Go Yoshizawa, "Overview of RRI practices in Japan", uploaded on 24 March 2017, available at <https://sites.google.com/site/osnrijsps/overview>

標葉隆馬「「インパクト」を評価する—科学技術政策・研究評価—」『国立国会図書館調査及び立法考査局・科学技術に関する調査プロジェクト報告書 冷戦後の科学技術政策』, pp.39-54, 2017年.

## (3) 講演(学会発表を含む)

吉澤剛「大学・学協会の社会的責任論」研究・技術計画学会第29回年次学術大会, 立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2014年10月19日.

吉澤剛「関与における責任を問い直す」第3回Future Earth/Transdisciplinary勉強会, 国立環境研究所地球温暖化研究棟1階交流会議室, 2014年10月24日.

吉澤剛「科学技術政策研究の多様性」日本文化政策学会第8回年次研究大会, 企画フォーラム「文化政策と科学・技術政策の対話」京都橘大学清和館134教室, 2014年12月6日.

- 吉澤剛「責任ある研究と市民関与: 市民とは誰か、関与とは何か」岐阜大学大学院連合獣医学研究科セミナー, 東京農工大学農学部, 2014年12月8日.
- 吉澤剛「社会的空間から見る『場』の可能性」共創による新たなイノベーション創出の方法論や場の在り方との関わり合いに関する勉強会, 文部科学省旧庁舎4階文教施設企画部会議室, 2014年12月9日.
- 吉澤剛「知識コミュニケーションにおける認知と感情」学融合研究事業・萌芽的研究会「人間科学から見る科学コミュニケーション」名古屋AP名駅会議室, 2015年2月12日発表.
- Go Yoshizawa ‘Japan after Fukushima: spaces and intermedia for technology and society’, ULg Workshop “Nuclear Societies and Technology Studies: Japan, Belgium, and Beyond”, Séminaire 3, Bâtiment B31, University of Liège, 23 February 2015.
- 吉澤剛「生命科学のバイオセキュリティとガバナンス」国立国会図書館説明聴取会(調査局内研修), 国立国会図書館本館5階調査局会議室, 2015年7月22日.
- Go Yoshizawa ‘The role of the third sector in community-based participatory research: a case of the Nagahama study’, 9th International Society for Third-sector Research (ISTR) Asia Pacific Regional Conference, Nihon University, Tokyo, August 28, 2015.
- Go Yoshizawa ‘A new mode of nuclear technology governance in the post-Fukushima age’, Belgian Nuclear Research Centre SCK-CEN, 12 October 2015.
- Go Yoshizawa ‘A new mode of nuclear technology governance in the post-Fukushima age’, 2nd workshop on Nuclear Societies and Technology Studies in Japan and Belgium, KULeuven, 13 October 2015.
- Go Yoshizawa ‘The power of narratives in policymaking’, 1st International Conference on Anticipation, Trento, November 6, 2015.
- 吉澤剛「《未来する》忙しさ—先見と責任の罫」研究会「Responsible Research & Innovationを考える」, 東京大学駒場キャンパス15号館1階104講義室, 2015年12月28日.
- 吉澤剛「ありたい社会とあるべき技術を描き出す—フォーサイトという実践」第20回関西大学先端科学技術シンポジウム, 関西大学100周年記念会館ホール1, 2016年2月21日.
- Go Yoshizawa ‘Strategic institutional research for responsible innovation in universities’, 19th STiPS-Handai Seminar, Seminar Room D, CSCD, 22 July 2016.
- Go Yoshizawa ‘Systemic, critical and reflexive skills for new scientific inquiry’, Keynote Address at Shizuoka Kita Youth Science Engineering Forum (SKYSEF) 2016, Shimizu Terra, August 11, 2016.
- 吉澤剛・谷口武俊「テクノロジーアセスメントを教えるということ」研究・イノベーション学会第31回年次学術大会、青山学院大学青山キャンパス、2016年11月5日。
- 藤本翔一・吉澤剛「責任ある研究・イノベーションのためのプロジェクトマネジメント—NEDO PJを事例に」研究・イノベーション学会第31回年次学術大会、青山学院大学青山キャンパス、2016年11月5日。
- Go Yoshizawa ‘Reflections on RRI education and teaching in Asia’, 15th IAU General Conference, Bangkok, Thailand, 14 November 2016.
- Go Yoshizawa, Nika Ando & Keiichiro Tahara ‘Programme evaluation and organisational development for transdisciplinary research’, presented at Open Evaluation 2016, Vienna, Austria, 25 November 2016.
- 吉澤剛「GOF研究から考える研究のGOF」第28回日本生命倫理学会年次大会、大阪大学コンベンションセンター、2016年12月4日。
- 相川高信・吉澤剛「現場の枠を飛び越える: 実践と政策のつなぎ方」ナレッジキャピタル超学校—対話で創るこれからの「大学」—、CAFE Lab. / グランフロント大阪 北館 ナレッジキャピタル1F, 2017年3月1日。
- Masahiro Matsuura & Go Yoshizawa ‘RRI Practices in Japan’, RRI-Practice 2<sup>nd</sup> consortium meeting, Paris, France, 9 March 2017.
- 吉澤剛「責任ある研究・イノベーションの実践と課題」「今、なぜ責任ある研究・イノベーションが必要か？」研究会、山口大学吉田キャンパス15号教室、2017年3月30日。

Go Yoshizawa 'Does a herd of sheep endure hardship? Values in emergent engagement', 3rd European TA Conference, Cork, Ireland, 18 May 2017.

吉澤剛「際立つ(U)(R)A」RA協議会第3回年次大会「URAとは何か？—科学技術社会論からの問題提起」セッション、あわぎんホール、2017年8月30日。

吉澤剛・岩瀬峰代・田原敬一郎「しまねアカデミアという挑戦—学術界の革新に向けて」研究・イノベーション学会第32回年次学術大会、京都大学、2017年10月29日。

吉澤剛「課題設定による先導的人文学・社会科学研究連携推進事業」シンポジウム、大阪大学会館講堂、2017年11月8日。

中村征樹「研究成果の発表と研究倫理: STAP問題から考える」, 北大ALP・JACST合同シンポジウム「研究成果をなぜ発表しどのようにつたえるのか」, 北海道大学, 2015年4月28日。

中村征樹「研究不正への対応と研究倫理教育」トライボロジー会議 2015春姫路シンポジウム「研究倫理への対応と倫理教育について考える」, 姫路商工会議所, 2015年5月27日。

中村征樹「科学者の社会的責任と科学者倫理」, 日本科学史学会第62回年会記念シンポジウム「科学者と経営の倫理と社会的責任」, 大阪市立大学, 2015年5月30日。

中村征樹「責任ある研究活動の推進と研究評価」第1回SPARC Japan セミナー2015「学術情報のあり方—人社系の研究評価を中心に」, 国立情報学研究所, 2015年9月30日。

中村征樹「責任ある研究活動の推進と人文社会科学系の研究倫理」第27回日本生命倫理学会年次大会学会企画シンポジウム「人文社会科学系の研究倫理」, 千葉大学, 2015年11月29日。

中村征樹「研究活動の不正行為への対応等に関するガイドライン(2014年8月26日文科科学大臣決定)について」日本分子生物学会BMB2015研究倫理フォーラム, 神戸ポートアイランド, 2015年12月1日。

中村征樹「研究公正における信頼の問題」安心信頼技術研究会信頼研究の学際化第1回ワークショップ, 大阪大学, 2015年12月10日。

中村征樹「研究不正への対応と責任ある研究活動の推進—評価の観点から」日本評価学会第16回全国大会共通論題セッション「研究倫理と評価」, JICA沖縄国際センター, 2015年12月13日。

中村征樹「研究不正問題をどう考えるか—研究公正と「責任」の問題」日本哲学会学協会シンポジウム「科学と社会と「研究公正」」, 京都大学, 2016年5月15日。

中村征樹「研究倫理教育をめぐる現状と展望」IDE大学協会近畿支部IDE大学セミナー「研究倫理教育の挑戦—不正防止から能力構築へ—」, 京都大学, 2016年8月26日。

中村征樹「研究不正再考—研究不正行為・好ましくない研究行為の類型学」日本倫理学会第67回大会, 早稲田大学, 2016年10月1日。

中村征樹「日本の研究公正の現状と課題」科学技術社会論学会, 北海道大学, 2016年11月6日。

Ryuma Shineha, Eriko Fukumoto, Daisuke Yoshinaga. "Government policy and national universities: A case of national universities in Japan", Atlanta Conference on Science and Innovation Policy, USA Atlanta, 2017.

標葉隆馬「再生医療の『責任ある研究・イノベーション』に向けて—質問紙調査の結果から見る含意」第16回日本再生医療学会総会, 仙台, 2017年3月。

標葉隆馬, 吉澤剛, 上田昌文, 中尾央, 川本思心「『科学』を『伝える』こと背景にあるもの—再生医療を巡るメディアとコミュニケーションの調査の事例から—」科学技術社会論学会第15回年次研究大会, 札幌, 2016年11月6日。

標葉隆馬, 上田昌文, 中尾央, 川本思心, 吉澤剛「自然科学系学協会におけるRRR活動に関する基礎調査」研究・イノベーション学会第31回年次研究大会, 東京, 2016年11月5日。

Ryuma Shineha, Yusuke Inoue, Tsunakuni Ikka, Atsuo Kishimoto, Yoshimi Yashiro. "Gaps in attitudes toward science and technology between scientists and the public: The case of stem cell research and regenerative medicine", OECD Blue Sky III Forum on Science and Innovation Indicators, Belgium, Ghent, 2016年9月21日。

標葉隆馬「『科学』を『伝える』こと背景にあるもの—再生医療を巡るメディアとコミュニケーションの調査の事例から—」STS Network Japan夏の学校2016, 2016年7月31日。

秋谷直矩「フィールドワーカーと研究倫理:質的調査に関する倫理審査と倫理綱領の検討を通して」第89回日本社会学会大会,九州大学,2016年10月8日.

中尾央「評価問題以前の問題:人文学・社会科学とは何なのか」第1回 SPARC Japan セミナー2015「学術情報のあり方-人社系の研究評価を中心に-」国立情報学研究所,2015年9月30日.

中尾央「大学学部教育の意義:高校と大学院,社会との接続を見据えて」関西教育の会,神戸大学,2015年11月15日.

中尾央「これからの科学技術と科学哲学」大阪市立大学理学研究科談話会,大阪市立大学,2016年2月9日.

中尾央「動物(福祉)に対する哲学的アプローチ」第三回動物福祉研究会,TKP品川カンファレンスセンター,2016年9月29日.

Jin Higashijima, Sachie Yoshida, Haruka Nakada. “Patient and Public Involvement Activities in Japanese Biomedical Research: Possibilities and Challenges”, ACMG Annual Clinical Genetics Meeting, Arizona, USA, 2017年3月21-25日.

野内玲・東島仁「高品質な研究倫理・公正教材の作成・普及に向けたCITI Japanプロジェクトにおける取組」第二回研究倫理を語る会,2017年2月.

東島仁「疾患当事者の研究参画:可能性と課題を考える」第37回日本臨床薬理学会学術総会,米子コンベンションセンター,2016年12月2日.

東島仁「連携活動を円滑にする上で何が必要か:研究公正を推進する体制作りの観点から」高等教育コンソーシアムにいがた「産学連携部会」,2015年3月17日.

川本思心「デュアルユース概念は『有用性』へと過拡張されているのか」第14回科学技術社会論学会年次研究大会,東北大学,2015年11月22日.

川本思心「RRIとデュアルユース」第15回科学技術社会論学会年次研究大会,北海道大学,2016年11月6日.

#### (4) その他(本事業で主催したシンポジウム等)

「Education in the Responsible Conduct of Research in the US」講演会,上智大学四谷キャンパス2号館5階2-507,2015年3月6日,12名(研究者12名).

「Responsible Research & Innovationを考える」研究会,東京大学駒場キャンパス15号館1階104講義室,2015年12月28日,25名(研究者15名,一般10名).

「今、なぜ責任ある研究・イノベーションが必要か?」研究会,山口大学吉田キャンパス15号教室,2017年3月30日,15名(研究者15名).

「しまねアカデミア第1回研究集会」島根県奥出雲町旧高田小学校(2017年8月21-22日),30名(研究者15名),吉田町(2017年8月23日),22名(研究者13名).